退職記念講義

多文化社会の光と影
—「多文化社会論最終講義」より —

中　野　雅　博

Ⅰ．はじめに

この度，定年退職にあたり最終講義を学部紀要に掲載することになった。本学では授業は15回行うことになっているので，最終講義は2009年度の「授業のまとめ」あるいは結論を書くことにする。

筆者の担当専門科目は，本来は「アメリカ研究」であり，本授業の「多文化社会論」は，学部のカリキュラム改革の際に，全科目の半期化，授業内容の明確化のなかで筆者が担当することになった科目である。そこで，「多文化社会論」の内容をアメリカの「移民史」と「多文化主義」を中心に組み立て，議論を展開し，それに若干オーストラリアやカナダの事例を加えることにした。

昨今，「多文化主義」とか「多文化社会」ということばが，よく言われるようになったが，アメリカに関して言えば，アメリカは建国以来，多民族・多文化社会であり，さらに19世紀の中頃から約6000万人の移民を受けいれて，世界でもっとも多民族・多文化の国家となっている。そこでアメリカの移民の歴史と移民を受け入れたアメリカ社会をテキストに，多民族，多文化の共生の実態と問題点を議論する。

Ⅱ．授業の構成と方法

学部向けの授業は受講者数が多いので，授業方法は教員から学生への講義方式（知識伝達）をとらざるを得ない。その結果，学生は教員が準備した講義内容を聞き，理解するという一方的な形態となる。そこでこの方式を少しでも改善するために，今年度は以下の3点に重点をおいて授業を展開した。

①毎時間，学生には先回の授業の最後に配布した資料やコピーを読んでくることを義務づけた。配布資料は，日本語の文献は，6ページから16ページ，英語の資料は，4ページから8ページ程度で，さらに新聞の記事のコピー，統計資料なども含まれる。

配布資料の内容は，次回の授業で議論するテーマであり，出席者は全員読んできていることを前提に授業を行った。

②毎回，授業開始後10分間の小テストを行った。テストの内容は，前回配布した資料の理解度をチエックするものであり，成績評価に直接関係するものではない。今回，授業登録者の約70％が出席したが（3, 4回生の履修科目なので就職活動で欠席した4回生が多く見られた），実施当初は，日本語の資料に関しては，かなり理解できていたが，英語文献に関しては予想外の悪い出来であり，出席者の半数の学生は読んでいなかった。

筆者が，このような資料講読を前提にしたのは，昨今インターネットの普及により学生の文章を読む力が低下しているように感じたからである。アメリカの大学教育の長所として，膨大な reading assignment にあるといわれている。大学における到達目標の一つに文章の読解力と論理的思考があるといわれているが，これには膨大な図書や論文の精読は不可欠である。そこで，アメリカでバルク・パックあるいはブック・パックとして学生に毎時間読ませる論文の一部や，図書からの抜粋と同じくらいの分量を読ませることを義務づけた。

③多文化社会論の授業は，その事例としてアメリカの事件やトピックを扱う。前述のそれに関る資料は，文字でその内容や概念を説明しているが，それが起こった状況や具体的な姿をイメージすることは受講生にとっては難しい。いままでアメリカに滞在したり，旅行したからといって，多文化社会の核心に関与する状況を想像できない。そこで，メデイア（主としてアメリカの教育テレビ局や英国のBBC，日本のNHKなど）が取材，編集したVTRやDVDを補助教材として利用した。

「多文化社会論」も一種の「外国研究」であり，いわゆる「異文化，他文化」の研究である。このような場合，ヴィジュアル資料の援用は，文字媒体とは次元の異なる大量の情報提供であり，アメリカの大学院授業でも多用されて授業の理解の大いなる助けとなった。

授業の構成は，最初は理解度テスト，前回の映像資料や授業への質問に対する回答からはじまり，その日のメイン・テーマの説明と議論の展開となる。授業にはパワーポイントを使うこともあるが，前回の配布資料に関するレジュメを作成して配布し，黒板への板書はない。そして，授業時の中間から最後にVTRを映して，その日のテーマの理解を深める。授業では，VTRの内容に関する質問や，筆者の授業への要望・疑問もあわせて書いて最後に提出する。

Ⅲ．今年度2009年度「多文化社会論」の内容（概略）

今年度の授業の内容は，以下の通りである。

1．多文化社会とは？　移民の概念

グローバル化時代における「多文化社会」とは？

山田史郎：移住と越境の近代史（『移民―近代ヨーロッパの探求①』ミネルヴァ書房

VTR「幸せもとめて」1994　アメリカ移民へのインタビュー記録

2．多文化主義をめぐる議論

アメリカ，カナダ，オーストラリア

二言語教育，市民意識，外国人労働者

ナンシー・グリーン：多民族の国アメリカ―移民たちの歴史　創元社 1997

野村達朗：「民族」で読むアメリカ　講談社現代新書　1992

3．移民国家アメリカの歴史―a nation of Immigrants

資料；Immigration to America 1986 USIA

クレブクール，大下尚一訳；アメリカ一農夫からの手紙　1782年

VTR　アリステア・クック：人種のつるぼ　the Huddles mess　BBC　1972

4．旧移民と新移民　Old Immigration and New Immigration

4・1　アイルランド人移民と差別　　宗教・他者性

K. ミラー＆P. ワグナー：アイルランドからアメリカへ

700万人アイルランド移民の物語　東京創元社　1998

4・2　中国人移民の歴史

19世紀の移民と戦後の移民

VTR　Chinese American's Experience NJN 1995（20分英語）

4・3　移民と　Push and Pull 要因

ヨーロッパの政治・経済状況

アメリカの発展・フロンテイアの存在，アメリカの産業革命と移民

都市発展と多民族社会（VTR）

明石紀雄・飯野正子：エスニック・アメリカ（新版）有斐閣 1997

4・4　日系アメリカ人と強制収容

新藤兼人：北米移民―ある女の生涯　岩波ブックレット　1992

VTR：新藤兼人「姉はアメリカの土になった」NHK　1995

4・5　イタリア系移民とユダヤ系移民

アメリカ移民史の王道（ニューヨーク）多文化・多言語・るつぼ？

Excerpts from Mary Antin's Diary（Russian Jews）1893

The Emigration of Rosa Cristoforo（Italian ）1884

明石紀雄・飯野正子：エスニック・アメリカ（新版）有斐閣

5．多文化社会の光と影

ロサンゼルス暴動 1992 と韓国系アメリカ人

5・1　デトロイトの韓国系移民殺害事件

5・2　ロス暴動と戦後移民の軌跡

5・3　ヘイト・クライム（民族差別犯罪）

VTR：もうひとつのアメリカ（アメリカ PBS，NHK　1996）

VTR：ロス暴動から一年（NHK　クローズアップ現代）　1993 年

村上由見子：アジア系アメリカ人―アメリカの新しい顔　中公新書　1997

高賛侑：アメリカン・コリアタウン　社会評論社　1993

6．ヒスパニックの増加と多文化社会アメリカ

6・1　二ヶ国語教育をめぐる問題

6・2　マイノリテイの権利と文化遺産・伝統

T・ワイヤー：アメリカ社会を変えるヒスパニック　日本経済新聞社 1993

VTR「苦悩するアメリカ」 NHK　1992 年 5 月

Ⅳ．本日の授業（最終授業）

テーマ：多文化社会の光と影

アメリカ社会が移民をどのように受け入れたかという事例をパターン化したものとして，以下のような，「移民に対する 3 つのパターン」が引用される。

①アングロ・サクソンへの同化論　Anglo conformity

A ＋ B ＋ C+I ＝ A ＋ A ＋ A+A

このパターンは，1940 年くらいまでは支配的なもので，すべての移民が，アングロ系の白人文化に同化するというものであった。

②人種のるつぼ論　amalgamation theory　　Melting Pot theory

A ＋ B ＋ C+I ＝ AMERICAN

「るつぼ」というのは，金属を溶鉱炉に入れて溶かし，合金を作る「溶鉱炉」のことである。このパターンは，多様な移民たちがアメリカで自然に融合しあい，元の民族とは異なった「ア

メリカ人」になるということを表現している。しかし，この溶け合う民族のなかには，アメリカ先住民族，黒人（アフリカ系アメリカ人），アジア系の移民は，含まれていなかった点は注意される。

③文化多元主義　cultural pluralism

A + B + C+I = A + B + C+I　or　A' + B' + C'+I'

民族や人種は，容易に融合するものではないし，融合する必要もない。これは多様性に対する評価であり，他人種・多民族の文化に対する寛容性を表している。しかし，他の文化の影響を受けて，若干の文化変容を経験するので，A → A' になる。これは文化多元論，オーケストラ論といわれたが，アメリカ社会では受け入れられなかった。問題は，主流文化のアングロ文化が他の文化の一段上に存在していることであり，完全なる文化相対化はなされていない。オーケストラにおける，指揮者と楽団員との関係からもわかる。

V．多文化主義

そこで，今日のアメリカ社会は，次の「多文化主義」multi-culturism になっている。

カール・デグラーは，「サラダ・ボウル論」と名づけ，アメリカの多民族の多様性をより積極的に評価した。アメリカ流のサラダは，日本の野菜サラダと違って，多くの材料がその独自の材料の味や形をそのまま保ちながら，全体のハーモニーに貢献するものである。

アメリカのレストランにあるサラダ・バーには多種多様な野菜が並べられており，客は自分の好きなものをサラダ・ボウルに好きなだけ入れて，好みのドレッシングをかけて食べる。材料同士は，決して交じり合うことはないが，別々の材料を一緒にたべることによって，単一材料では味わうことのできない，「おいしさ」を満足することができる。これが，サラダ・ボウル論である。また，よく言われる「モザイク論」もおなじで，それぞれのタイルは，決して変質・変容することなく社会というキャンバスに並べられるが，個々のタイルが集まることによって全体で大きな意味のある「絵画」「イメージ」を表現している。つまり，アメリカでは，多様な民族集団（エスニック集団）の文化は，その価値において対等である。

これがアメリカ社会に受け入れられる背景には，1950 年代から 60 年代に展開した公民権運動，Affirmative Action Program（積極的優先処遇，雇用均等法）の実施，移民法の改正などの一連の運動や活動がある。また，この具体例として，二言語併用教育の実施や，全米の大学におけるエスニック研究の学部や学科の設立があげられる。

Ⅵ.「分裂するアメリカ」　「人種」対「人種」から「民族」対「民族」へ

しかし，上記の多文化主義の普及や拡大が進むと，「白人」あるいは「WASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）」もエスニック集団のひとつになり，従来のような優位性を保てなくなる。そこでこの動きに反発して，「White backlash（白人の巻き返し）」が見られるようになるし，文化相対主義の強調のなかで，エスニック・リバイバルという自民族・自文化中心主義的運動も盛んになり，この状況下で起こった代表的な事件が，1992 年のロサンゼルス暴動である。この事件は，従来の人種対立（白人 vs 黒人）ではなく，アメリカのロサンゼルスのインナーシテイ（貧困地域）での，「アフリカ系アメリカ人（黒人），ヒスパニック vs　韓国系アメリカ人」というエスニック・グループの衝突・摩擦（conflict）である点が，従来のパターンと異なっている。

ここで「多文化主義」に関する，問題点を 2 点指摘できる。

(1) それぞれの人種や民族集団の独自性を尊重する「多文化主義」が行き過ぎると，エスニック集団間の競合，摩擦，差別が激しくなり，ヘイト･クライム（人種･民族差別にもとづく犯罪）の増加に繋がっていく。

(2) アメリカは共通理念のもとに，人種・民族の統一体を志向する「多から一へ」を目標とする社会であったはずが，個々の権利，利害を主張しあって，「分裂していく」危険性を予感させる。アメリカは，分裂するのか？（前回の授業の VTR でのシュレジンジャー・Jr の議論）

Ⅶ. 多文化主義，多文化社会に諸説を整理

(1) デグラーは，アメリカ文化の多様性を評価しつつも，アメリカの共通の概念を正しく反映したアメリカ史「全体論的なアメリカ史」の必要性を議論している。「アメリカ内部の多様性（モザイク）は，あくまでもアメリカの全体像の一部でしかない。だから，アメリカは，過去も現在も多様性を同じように持ちながら，同時にその多様性をアメリカの特質・特有と認めるような「アメリカ国民の歴史的定義」を必要としている。」

(2) 古矢旬は，「移民，移動」が，アメリカ史全体を理解するための中心的観点であるとし，移民群のもたらす国民の多様性の進展を，国民の分裂の予兆とするか？新たな統合へ向かう過渡的混乱か？と疑問を投げかけている。

さらに移民問題を，アメリカにとっての新たな「フロンテイア」と呼び，（注：アメリカ開拓時代の西部，宇宙開発，大都市再開発のいずれも「フロンテイア」と呼ばれたが），アメリカ社会が国際社会と出会う場と位置づけて，そこでの対立，混乱，融合などの過程を経て，「新

しい文化」が生まれるとポジテイブに捉えている。

そして，アメリカのおける「多様性」の意味の変容を指摘している。

①民族，宗教，文化の多様性は，「多から一へ」の国家理念と矛盾している。

②従来の移民は，全米に移動し拡大拡散する多様性であったが，今日では移民やエスニック集団は，「地域的（特定の州）」，「局所的（大都市のインナーシテイ）」に集中して，自文化だけの「集住社会」を作っている。

Ⅷ．おわりに

多様性の変容・変質は新たな問題を惹起する。移民統合の隘路としての，教育，貧困，福祉の問題である。前回の授業で議論した教育問題に関しても，英語を共通言語として「公教育」を行ってきた方針は，多文化主義の下での「二ヶ国語教育・二言語教育」の実施となり，社会統合の鍵としての英語教育の差別化が，ホスト社会からの阻害という新たな社会問題を生むことになる。

また，貧困や福祉問題も，本来，公民権運動やアメリカ黒人史のなかで黒人問題解決の方策として実施されている制度を，激増するヒスパニックなどのエスニックグループに適応することには，「自助努力」を前提とするアメリカ社会では，容易に受け入れられない。

しかし，アメリカの強みは，アメリカの「多様性」にあって，その多様な価値が刺激しあい，新たな価値や創造性を生み出すことも事実である。だからアメリカの移民に関する問題は，アメリカの「多文化社会」の将来をめぐる議論である。

Ⅸ．VTR：文化は混血する―多文化社会ロスアンゼルスのＡからＺまで

今福龍太氏のフィールド・ノートから（NHK 教育　1996 年）

最後に，上記の VTR の中の映像作家・写真家カルロス・メイヤーの多文化社会ロサンゼルスに関するインタビューを受講者に見てもらった。筆者の意図は 2 点である。

①メイヤーが，多文化社会ロスアンゼルスを車で案内する時に，エスニックモザイクのような町並みを示しながら，「ロスはマルチカルチャーの町と言われるが，文化相対主義の中，それぞれのモザイク文化は全然交じり合っていない。Multi-culture 多文化ではなく，Mono-culture 単一文化だ！」との発言は，アメリカの今を如実に表現している。

②「それぞれの文化には壁があり，それを乗り越えようと思えば，その高さをはからなければならない。多くの文化人や学者は，口を開けば Multi-culture を声高に叫び，それを神話化して祭り上げ何もしない。それよりも大切なことは，マルチカルチャーを口にすることよりも，

それを乗り越える具体的な行動をすぐに起こすことである。その場所にいって，その文化を共有し，「こんにちは」でも良いから，言ってみることである。」

この 2 点は，筆者が「多文化社会論」の授業の中で，結論として述べたことと同じ考えである。筆者は，さらに続けて，「あなたは。何も外国に行かなくても，異文化理解や多文化社会の価値を共有できますよ。貴方の実家に帰って，両親や祖父母と話をしたことがありますか？彼らの価値観は，いまの若い世代と異なっている。その文化や価値をあなたは共有できますか？そして，家に帰らなくても，いまこの教室の隣に座っている人と，同じクラスの人と，同じゼミの人と，お話（コミュニケーション）出来ますか？多文化主義の中で生きていくということは，そういうことですよ。」と説明する。

では，どうすれば，それが少しでも可能になるのだろうか。筆者は，出前授業や講演会で「異文化理解」，「多文化共生」の話をする機会が何度かあった。その時に，いつも最後に特に若い世代に，価値観のことなる人との共生の秘訣を話してきた。

それは，①人に親切にされた場合，感謝のことばを素直に言うこと。②自主独立，自助努力の精神。自分で出来ることは他人を頼らず出来るだけ自分ですること。③心を開くこと。これが一番大事です。

上記の VTR の写真家カルロス・マイヤーも言っているように，口先だけの「多文化主義の理解」は無意味である。すぐに行動あるのみです。

筆者の本授業の最後は，いつもアメリカ的プラス思考の言葉で，締めくくります。

「You can do it!」「And, do it, Now!」

ご清聴，ありがとうございました。

参考文献

古矢旬：「移民国家」における「移民問題」―現状と展望―（五十嵐武士編：『アメリカの多民族体制―民族の創出』東京大学出版会　2000 年）

油井大三郎・遠藤泰生編：多文化主義のアメリカ―揺らぐナショナル・アイデンテイテイ（東京大学出版会　1999 年）

山田史郎他：移民―近代ヨーロッパの探求①（ミネルヴァ書房　1998 年）

山田史郎：世界史のなかの人種―世界史李ブレット⑪（山川出版社　2006 年）

有賀夏紀・油井大三郎編：アメリカの歴史―テーマで読む多文化社会の夢と現実（有斐閣　2003 年）

ナンシー・グリーン：多民族の国アメリカ―移民たちの歴史―（創元社　1997 年）

野村達朗：「民族」で読むアメリカ（講談社現代新書 1099　1992 年）
新藤兼人：北米移民―ある女の生涯―（岩波ブックレット，岩波書店　1992 年）
村上由見子：アジア系アメリカ人―アメリカの新しい顔（中公新書　1997 年）
高　賛侑：アメリカ・コリアタウン―マイノリテイの中の在米コリアン（社会評論社　1993 年）
カービー・ミラー他：アイルランドからアメリカへ―700 万アイルランド人移民の物語（東京創元社　1998 年）
トーマス・ワイヤー：米国社会を変えるヒスパニック―スペイン語を話すアメリカ人―（日本経済新聞社　1993 年）
Reed Ueda: Postwar Immigrant America; A Social History（Bedford Books of St. Martin's Press, 1994）
Katharine Emsden: Coming to America ; A New Life in a New Land（Discovery Enterprises, Ltd. 1993）
明石紀雄監修：21 世紀アメリカ社会を知るための 67 章（明石書店　2002 年）
明石紀雄・飯野正子：エスニック・アメリカ（新版）（有斐閣　1997 年）
伊藤章：エスニック・アメリカの課題と展望（伊藤編：『エスニック・アメリカ』北大 1997）
朝日新聞記事：米国はどこへ―移民新世紀　浮遊する日系（上），（中），（下）1995 年 5 月
アジアの風（上），（中），（下）1995 年 5 月
「特別の国の神話が揺らいでいる」1995 年 6 月 2 日
ダニエル・チョイ：アジア人でもなければ，アメリカ人でもない「私」（News Week 1992 年 5 月 21 日）
メリンダ・リュウ：覚めやらぬアメリカの悪夢―ロス暴動から 1 年韓国系市民の苦悩（News Week 1993 年 4 月 8 日）
矢部武：多民族共存の実験に挑むアメリカ（世界　1992 年 9 月）
梶田孝道：「多文化主義のジレンマ―選択肢は何か」（世界　1992 年 9 月）

（2010 年 1 月 19 日，定年退職記念講義）